鶴山書院報

第９号
公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地３東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com
発行人
理事長 横尾俊彦

いまこそ論語

～渋沢栄一と『澁澤論語』～

公益財団法人孔子の里
理事長　横尾　俊彦
（多久市長）

今年のＮＨＫ大河ドラマで渋沢栄一翁の物語が放映中です。新一万円札の顔となる先覚者ですが、『論語と算盤』の著者でもあり、まさに無類の論語実践家として有名です。

ともすると利益追求のみに走りがちな経済活動・事業経営も、そこに規範や倫理あるべしという信念と視座に立ち、論語の規範を実践するという熱意で、明治維新以降の日本社会の繁栄と世直しに奔走します。

気づけば、ほっておけない、やらねばという思いから様々な事にも関わり、多くの企業や事業を世に生み出しました。現代につながる事業も多く、社名を聴けば多くの人が知るものも多数あります。

改めて「澁澤論語」を紐解き、翁の考え方の一端を紹介してみたいと思います。

「澁澤論語」は大正十二年四月より十四年九月に行われた翁（八三～八五歳）の口述録で、九百六十頁に及ぶ『論語講義』のことです。

明友でもある三島中洲・二松学舎創設者の没後には、十二年間にわたり舎長（理事長）も務めた縁もあり、昭和五十二年の二松学舎創立百周年記念事業として出版されました。（本財団の全国ふるさと漢詩コンテスト選考委員長・石川忠久先生は元・二松学舎大学学長でもあります。）

論語の実践で活路を拓く

その冒頭の「論語總説」には孔子に関する記述もあり、「孔夫子の人となりは一言にして言えば常識の非常に発達したる圓満の人というが適評」とし、「偉大なる平凡人というも適当であろう」、さらに「孔子は萬事に精通して、圓満無碍の人である。常識の非常に暢達（のびのびしている）方である」と解しています。

そして「余は深く孔子に学んでその教訓を循守して往けば、家に處し、世間に出でて、非難せられざる熟練圓満の人物になり得らるるものと信ずるなり」と述べ、「余は論語の教訓を守ってゆけば、人はよく身を修め家を齊へ、安穏無事に世を渡って往けるものと確信するのである」と続きます。

若き日の学びに関する記述もあります。

「余は七歳の時に實父より三字経を教へられ、次に従兄の尾高蘭香より大學・中庸・論語・孟子の四書句讀を授けられ」ています。当時は「諸侯の國々もすべて漢籍を以て教育を施し」とあり、各藩は教育を重んじ、四書はいわば必須テキストでもあったことが分かります。

翁は明治六年に官界を退き、実業に身を委ね、それから実に五〇〇社を創業といわれ、まさに日本資本主義の父と呼ばれる活躍です。

事業成功の成否については「会社を経紀（筋道を立ててとりしきる・運営する）する人物の如何にある」とし、「当局者をして、事実上または一身上恪循（謹んでそれに従うこと）するに足る規矩準縄（物事や行動をおこすときに基準や標準になるもの）がなければならぬと考えた」のです。そして「余が実業界に立ちて自ら守るべき規矩準縄」として『論語』を位置づけて、「知行合一の極致に到達せんと欲する」実践に努め、多くの偉業を成就されたのです。

改めて論語愛読家が増え、学びの輪が広がることを期待します。

草場佩川と『鶴山石先生遺稿』

佐賀大学　教授　中尾友香梨

多久の漢学者、**石井鶴山**（一七四四～一七九〇）の遺稿の翻刻が、まもなく世に出るに際し、その解説の一部をここに抄録して記念とする。翻刻の底本に用いたのは、故**細川章**氏（元多久市立図書館司書、多久古文書の村の創立者）から多久市郷土資料館に寄贈された『鶴山遺稿』写本三冊である。

それは細川氏の祖父、**大塚廟山**（一八六九～一九五〇）が娘の幸（章氏の母）に書写させたものであるが、多久長尾村の出身で廃藩置県まで東原庠舎の教諭兼学監を務めた**徳永鼎**（一八二八～一九二〇）の旧蔵本とほぼ同じ体裁、同じ内容のものであり、もとは**草場佩川**（一七八七～一八六七）が東原精舎（のち東原庠舎）の書庫に蔵した『鶴山石先生遺稿』の転写本である可能性がある。

佩川は鶴山より一世代遅れて同じ多久に生まれたが、幼い頃より鶴山の名前をよく耳にしていた。佩川による次の記述からそのことが窺える。

余、嘗て幼き時に傅に就き、郷閭の先儒の名を熟聞す。而して鶴山石先生の巨擘たるを知る。其の履歴を問えば、則ち曰く、「人や貧窶側陋の中に生長し、其の才、初め大いに迂なるに似たり。而れども一朝にして発憤し、勉学して倦まず、終に大器晩成を得たり（以下略）」と。

（原漢文、以下同）

この記述からわかるように、佩川は幼い頃に付き従った学問の師から、郷里多久の先儒の名をよく聞かされていた。そして鶴山がその中でも特にすぐれていたことを知った。その経歴をたずねると、鶴山は貧困の中で育ち、才は初め甚だ鈍く見えたが、あるときから発憤して学問に励み、ついに大器晩成を果たしたという。

鶴山の略歴については、本誌第３号の「儒林」に、服部政昭氏による要を得た紹介が載っているので、そちらを参照されたい。

後に佩川は鶴山の遺稿を入手して読むことになる。次の記述を見よう。

既にして其の遺稿二編を丹水石先生の所に得たり。其の一は「北海観風草」たり、一は則ち甫め郷邑に在りて作る所、及び後来の雑著のみ。余、之れを読みて編尾に到り、其の終焉の作を得たり。曰く、「玉皇の使者　自ら風流、四十七年　花月に遊ぶ。今日　天に朝するに　一恨を餘す、君恩　海嶽のごときも　未だ曾て酬いず」と。其の風流洒落、忠厚凱惋、以て其の人と為りを悉くすに足る。余、此に於いて又た猶お闕文に及ぶの嘆有りて、未だ其の全豹を窺うを得ざるなり。

丹水石先生とは、鶴山の子、文橘のことであろう。佩川より一歳年長である。佩川は丹水のところで鶴山の遺稿二編を入手した。一つは「北海観風草」であり、いま一つは若いころ多久で詠んだ詩と後の雑著を合わせたものであった。遺稿の末尾には鶴山の絶命の詩も収められており、この一首からも鶴山の人となりが充分に窺えると、佩川は言いつつも、その一方で鶴山の遺稿が多く散逸したことを嘆き、全貌を知ることができないのを残念がった。

佩川の文の続きを見よう。

曩者、藝府の頼文学、千里に書を投じて曰く、「某、曾て石子と旧有り。其の才の敏なるに伏し、深く其の詩を愛す。其の『雪後渉渓』等の作の如きは、則ち特に清絶たるを覚ゆ。今、其の人と詩とは復た睹るべからず。豈に傷まざらんや。子の其の同郷たるを聞きて、其の遺草の猶お存するもの有るを想う。幸わくは写し寄せて以て区々たる老懐を慰めんことを」と。

文中に見える「藝府の頼文学」を、『旧多久邑人物小志』は頼山陽としており、以降この説が踏襲されているが、右に引用した段落の最後の部分に「老懐」とあり、また佩川はこの人物を「頼翁」とも称しているので（後掲）、これは文化十一年（一八一四）当時まだ三十五歳の頼山陽であるはずはなく、その父、頼春水（安藝広島藩儒、当時六十九歳）でなければならない。

二歳下の春水が鶴山と交わったのは、主に江戸で大田南畝（旗本、文人）が主催する宴や詩会においてである。そして春水は晩年に佩川へ手紙を寄せて次のように申し出たのである。わたしはかつて鶴山と交友があり、その俊敏な才能に敬服し、その詩をこよなく愛した。彼の「雪後渉渓」などの詩はとりわけ清らかですぐれているように感じた。今はその人も詩ももう見ることができない。ああ、なんと悲しいことであろうか。あなたが彼と同郷であると聞いて、その遺稿がまだ一部残っているのではないかと推測する。どうかそれを写して送ってほしい、この区々たる老懐を慰めるものとして。

これを受けて、佩川はさっそく鶴山遺稿の収集と整理にとりかかった。

余、諸れを其の遺孤に謀るも、篋中は已に空し。適たま府学、前脩の遺稿を撰するを聞く。乃ち府学に

詣り、其の編を閲せんことを請う。因りて先生の遺稿に係るもの五巻を借りて、山校に帰り、同志に課して以て之れを写せしむ。既にして之れを閲すれば、則ち所謂「雪後渉渓」の作、及び予讃薩隅の諸篇は、亦た皆な逸す。故に斯の編と雖も採摭の未だ完からざるを知る。且つ編中の年次、恐らくは錯淆有るも、敢えて妄りに之れを覬縷せず。（中略）未だ俄かに頼翁に償諾する能わず、姑く之れを学庫に蔵めて、以て同志の吟玩に供し、而して再抄の暇を待つのみ。

まず鶴山の遺児文橘に問い合わせたが、石井家に鶴山の遺稿はもはや残っていなかった。ただ折しも藩校弘道館が先賢の遺稿集を編纂したことを聞いた。そこで弘道館から鶴山の遺稿を収めた五巻を借り出して、東原精舎に持ち帰り、諸生に写させた。写し終わったものを見ると、春水の言う「雪後渉渓」詩、及び伊予、讃岐、薩摩、大隅を遊歴したときの諸篇は、やはり含まれていなかった。そこで弘道館が編纂した五巻も完全ではないことがわかった。しかも作品の年次が乱れているようであったが、勝手に編集し直すことも憚られるので、すぐさま春水の要請に応えることができず、しばらくこれを東原精舎の書庫に保管して、諸生に吟翫させ、いつか写し直す暇があることを待つことにした。

佩川による右の一連の記述は、弘道館が編纂した『鶴山遺稿』五巻を借りて来て東原精舎の諸生に写させ、謄写本を書庫に保管する際にその冒頭に附した「謄写鶴山石先生遺稿叙」のものである。

では、『草場珮川日記』から鶴山の遺稿に関連する記事を拾ってみよう。

文化元年（一八〇四）十月二十九日

夜、鶴山先生「扈遊録」一篇を読む。

文化十年（一八一三）十一月二十三日

此れに前だちて、国学に集古の挙有りて、以て邑人の文詩を徴す。因りて鶴山、桐野諸子の稿を呈す。今、採摘を経て還さる。

同年十二月三十日

穀堂先生及び頼文学の書等至る。

文化十一年（一八一四）六月二十六日

諸生に課して鶴山先生詩文集を臨写せしむ。

同年八月十二日

鶴山先生詩文集、校閲し業を卒う。

同年同月二十日

鶴山文稿五冊、国学に還納す。

（原漢文）

佩川が文化元年十月に読んだ鶴山の「扈遊録」とは、天明七年（一七八七）に藩主の江戸参府に従ったときの紀行詩を集めた「丁未扈遊録」のことであろう。佩川がこれをどこで入手したかは記されていないが、丹水（文橘）のところで入手した鶴山遺稿二篇には含まれていないので、あるいは藩校弘道館に蔵されているものを借り出して読んだのであろうか。このとき佩川はまだ十八歳、前月、弘道館に入学したばかりであった。古賀穀堂から「珮川」の号を与えられたのもこの時期である。

それから約九年の歳月が流れた文化十年に、藩校弘道館で古資料を収集・編纂する事業が行われ、多久出身の先賢たちの詩文も求められたので、鶴山と智雲（桐野）らの遺稿を提供したという。鶴山の遺稿に関しては、丹水のところで入手した二篇を提供したのであろうか。

その年の十二月に頼春水から手紙が届いており、あるいはこのとき、春水からも鶴山の遺稿を求められたのかもしれない。翌年、佩川は弘道館が編纂した『鶴山石先生遺稿』を借り出し、六月から東原精舎の諸生に写させている。当時、佩川は東原精舎の学監を務めていたが、翌月には教授長上に昇任した。八月十二日に校閲を終え、同月二十日に『鶴山石先生遺稿』五冊を弘道館に返還している。

一連の記述からわかるように、東原精舎には弘道館が編纂した『鶴山石先生遺稿』五巻五冊を謄写したものが保存されていたはずである。しかし弘道館のものも東原精舎のものも、今は所在がわからない。

このたび、翻刻の底本に用いた『鶴山遺稿』細川本と、校訂に用いた徳永本は、ともに三冊の体裁をとっており、巻次は不明である。五巻五冊が三冊に改められたのか、それとも二冊が失われて三冊のみが残ったのかは不明だが、第一冊（文）三十五丁、第二冊（詩）六十三丁、第三冊（詩）八十五丁と、丁数が甚だ不均等であるのを見れば、もとの五巻五冊が三冊に改められた可能性が高い。ただ前述したように、文化十年の五巻五冊の編纂時にはすでに多くの遺稿が散佚していた。

その散佚稿の一つが、現在国立国会図書館に蔵されている『鶴山詩集』である。該書は鶴山が明和九年（一八七二）に京都から近江、美濃を経て名古屋に向かい、当地で過ごしたおよそ一年の間に詠んだ詩九十七首を収める。『鶴山遺稿』と重複する作品は一首のみである。

このほかにも、鶴山の詩文は、書幅の形で伝存するものがいくつかある。例えば、「相浦八景」「北方八景」など。いずれも『鶴山遺稿』『鶴山詩集』には収められていない。翻刻に際し、散逸作品もできるかぎり収録したが、われわれの調査が及んでいない作品はまだまだあるはずである。ぜひ多くの情報が寄せられることを願ってやまない。

藩校弘道館が編纂し、草場佩川がいつか自らそれを補完することを願いつつもついに成し遂げ得ず、そのままになっていた『鶴山石先生遺稿』が、いよいよ活字化されて世に出る。多久が生んだ漢詩人、石井鶴山の研究が、本格的に始まろうとしている。

『珮川詩鈔』版本と版本が物語るもの　第３回

公益財団法人　孔子の里　評議員
多久市郷土資料館長　藤井伸幸

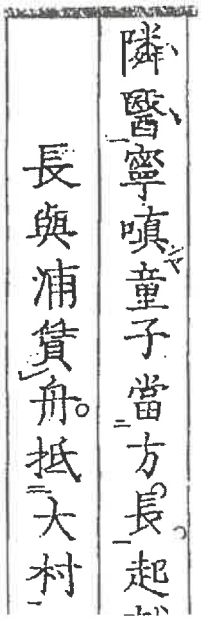
※前回は館所蔵の表紙見返しの版木によりＫ本Ｍ本の見返しが印刷されたことを証明し、Ｍ本の印刷年代を推定しました。
※この稿では木版本（版本）に対応する語句として「版木」を使いますが、「板木」とも書きます。

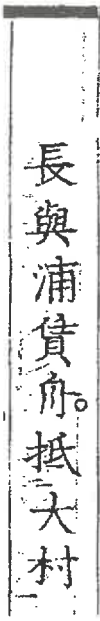
館所蔵の版木で版本が印刷されたことの証明

（一）版木と版本の文字を逐一確認することの困難さ

次に示す館所蔵の珮川詩鈔版木巻一24（裏部分）の二種の版木を御覧ください。写真は反転しています。一行目は前行からの漢詩の続きが彫り込まれ、左右の版木で文は異なります。二行目は左右の版木ともに同じ漢詩の題が彫り込まれています。右は幕末期、左は明治期に使用されたと考えられる版木です。「長與～大村」の文字を比較してください。
※これらは、館所蔵珮川詩鈔版木の別々の面に刻まれていますが、一連の版木であることは確かです。

次に、これらの版木により印刷された版本の「長與～大村」の文字を比較してみます。





このように、文字が版木に彫りこまれ、版本として印刷された時期は異なりますが、同じ文字はかなり類似していることが分かります。つまり、版木と版本の文字を比較することでは、明確に版木を特定することが困難であることを示しています。

（二）館所蔵の版木で版本が印刷されたことの証明

そこで、別の視点つまり版木と版本に残された様々な痕跡を観察し、前記の問題点を克服し、証明を試みます。このことで私が検討したのは総計120箇所以上ありますが、典型的な例を16箇所取り上げて説明します。下の一覧表を御覧ください。

①は版本大枠二箇所に小さな白抜きの□が見え、これに対応する凹が版木にあります。②は版本大枠に補修痕が見え、これに対応する補修が版木にあります。③は版本上覧の左罫線に欠けが見え、これに対応する切れ目が版木にあります。④は版本中央の罫線に欠けが見られ、これに対応する切れ目が版木にあります。⑤は版本大枠に弧状の欠けが見られ、これに対応する削り痕が版木にあります。⑥は版本のレ点中央に欠けが見られ、これに対応する切れ目が版本にあります。⑦は版本の「夕」中央に欠けが見られ、これに対応する切れ目が版木にあります。

版木写真反転								
巻一　七表①	巻一　十八裏②	巻一　二十表③	巻一　八裏④	巻一　十裏⑤
K本（幕末期）	大枠七・九行小□	左枠線補修19㎜	上欄左罫線欠4㎜	罫線欠4㎜	大枠弧状欠
M本（明治期）	同上	同上	同上	同上	同上

版木写真反転	K本（幕末期）	M本（明治期）
巻三　二表⑥	レ点中欠	同上
巻三　十三裏⑦	夕点下欠	同上
巻四　三表⑧	大枠弧状の線	同上
巻四　二十表⑨	大枠罫線補修切込	同上
巻四　二十五裏⑩	大枠○	同上

版木写真反転	K本（幕末期）	M本（明治期）
巻一　二十表⑪	上覧無	上覧追加二行
巻一　二十六裏⑫	「在」	差替「客」
巻二　二十三裏⑬	上覧二行	上覧追加左二行
巻三　九表⑭	上覧無	上覧追加二行
巻四　二表⑮	「宵旰」	差替「夙夜」
巻四　三十一表⑯	上覧三行	上覧追加右二行

⑧は版本大枠に弧状の線が見え、これに対応する切れ目が版木にあります。⑨は版本大枠隅に補修痕と欠けが見られ、これに対応する版木に補修と切れ目があります。⑩は版本大枠に白抜きの○が見られ、これに対応する版木に丸い穴があります。⑪はK本にない上覧追加がM本にあり、これに対応する入木が版木にあります。⑫はK本の「在」がM本で「客」に差替えられ、これに対応する埋木が版木にあります。⑬はK本にない上覧追加がM本にあり、これに対応する入木が版木にあります。⑭はK本にない上覧追加がM本にあり、これに対応する入木が版木にあります。⑮はK本の「宵旰」がM本で「夙夜」に差替えられ、これに対応する埋木が版木にあります。⑯はK本にない上覧追加がM本にあり、これに対応する入木が版木にあります。

①～⑩については、M本K本に共通に見られる□○、罫線欠、補修痕、文字欠であり、それらに対応する凹穴、罫線切、切削、切れ目が版木に見られます。このことは、本館所蔵の版木が、幕末期の発刊以来、明治期の刊行まで使用され続けたことを物語っています。

⑪～⑯については、K本には無かった上覧が、M本では入木により追加され、K本の文字がM本では埋木により差替えられています。これらの入木・埋木は、本館所蔵の版木を利用し追加・修正していることが、版木の断面に残る入木の作業跡や版木上面に残る埋木の傷跡から分かります。

これらの事から、本館所蔵の版木によりK本とM本が確かに印刷されたことが分かります。但し、⑪～⑯の追加・修正が、K本発行前～M本発行前の約四半世紀間のいつなされたのかは不明です。（続く）

※入木（いれき）と埋木（うめき）は同じ意味で用いますが、この稿では入れ込むと埋め込むを区別しています。

草場佩川と西鼓岳

椋ノ瀬橋に寄せて

草場佩川の会　副会長　尾形恵子

有懐三郎　西賛稱在三郎

山寂三秋盡　天寒一雁遥　遊望有レ所レ待　獨立即來橋

珮水遶郭。郭門駁樹下有橋曰駁瀬橋。駁一名即来。

偶見引爾雅即字誤作郎而用之。非本意

珮川詩鈔　巻三

これは表題の通り佩川が西在三郎（鼓岳）に想いを巡らせた詩である。

「山寂して三秋尽き　天寒にして一雁遥か　遊望待つ所にあり　独り立つ即来橋」

山（多久）は寂しく三年目の秋が過ぎようとしている　空は寒く遠くに一雁が飛んでいる　逢うことを願って　ひとり即来橋に立っている。

この詩は当然「椋ノ瀬橋」の情景のはずだが、「即来橋」というのはどういう由来なのだろうか。詩の後註に眼を通してみた。

まず、「珮水（多久川）は多久の城下町を巡り、入り口の駁樹の下に「駁瀬橋がある」

「駁」というのは「椋」のことなのか、調べてみるが、椋ノ木の別名は「撲樹　ボクジュ」だった。また椋ノ瀬橋がかつて駁瀬橋と表記されていた記録は見えない。次に「駁は一名を即来という」だが、ここでも椋と駁のかかわりはわからない。ただ、とりあえず駁は繰り返すことなので、即来という解釈は理解できないこともなかった。そして「たまたま爾雅（じが）を引いていたら即の字を誤って郎と記して用いている箇所を見つけた。甚だ不本意ながら」と結ばれている。これが後註であるが、これらの文言をどう判じるべきか、私なりに詩の情景と背景に思いを巡らせてみた。

どうやら佩川は、即と記すべき箇所に誤って使われた郎の字を見て、ただそれだけのことで、西在三郎を思い起こさずにはいられなかったようである。「爾雅」というのは中国最古の類語辞典で、中国古典の文字や章句を解釈する「訓詁学　くんこがく」の書である。日本の「倭名類聚抄」も、この「爾雅」を規範として編まれたものである。前述した通り椋樹は別名を撲樹というが、駁樹と記すことはない。それを何故「駁」としたのか。考えられるのはこの二字が、「ハク」という音符が共通していることで、撲樹を駁樹と記しても、声に出してしまえば、ほとんど同じになることである。「駁」には「即来」という意味がある。しかしこの辞書は「即」と「郎」を間違えている。となれば「駁」は「郎来」の意味となる。

「駁」それはあまりにも在三郎にふさわしかった。繰り返し繰り返し詩文を唱えてやまない愛弟子、打てば打ち返す年少の義弟。もうそろそろ在三郎がこの橋を渡って帰ってくる頃である。約束の三年は過ぎた。私はこの橋で待っている。郎が来る橋、それは椋ノ瀬橋である。しかし、辞書の規範に従って、私は心ならずも即来橋と書いた。

佩川の脳裏にはこの詩を見て大喜びしながら反駁する在三郎の姿が浮かんでいたに違いない。

佩川四十二歳、妻の弟である西在三郎は鼓岳の号で知られているが、当時は二十六歳、山校（東原庠舎）で佩川に学び、藩校弘道館に進んでのち、二十三歳で江戸の古賀侗菴の門に入っていた。

かつて佩川はこの在三郎を「またこれ奇童」と「珮川日記」に記した。

「観西生製横笛　生本有文才　而嬉戯之間　洩露巧思率如　亦是奇童」

「珮川日記」文化十四年（一八一七）八月十一日

十五歳の在三郎が東原庠舎での音楽の時間に篠笛を作っているのを佩川は黙って眺めていた。竹に穴を開ける、それが嬉しいやら楽しいやら、悪童さながらにふざけているのだが、生まれつき真の文才を持っている。その戯れのひと言ひと言が、一筋に連なる珠のように口からこぼれ出ている。言うま

でもない神童である。

在三郎は頻繁に詩や文章を持って佩川の元を訪れた。それに目を通す佩川は在三郎の将来へ思いを馳せ、弘道館へ、そして江戸へと学問の道をいざなっていくことになる。

しかし気がかりがないわけでもなかった。良くも悪くも傑出し過ぎている。とりわけあのきかん気は厄介だったようである。

「珮川日記」文政三年八月二十二日に面白い記述がある。「前此　仲斌・袴叔共在庠有過挙　余痛責之…」仲斌は鶴田平治（鶴田斗南・高取伊好の父）でやはり義理の兄弟に当たる。袴叔は在三郎。よりによってこの二人が東原庠舎の学内で過ちを犯した。学業優秀な二人を激しく叱責せざるをえなかった佩川。この夜二人は代わる代わる謝罪にあらわれた。同じことを繰り返し婆説（説教）を垂れたと記されているが、後年この二人がそれぞれに蟄居を命じられたことが思い起こされる逸話である。

ところが、一週間もすると、佩川はまた嬉々として日記に書き残すことになる。

「叔襄（西在三郎）従余講完大学」　「珮川日記」文政三年八月二十九日

在三郎が「大学」を修めたというのである。そこに「私が説いて聞かせた」と書かずにはいられなかったところに、佩川の心情がにじみ出ているのではないだろうか。

弘道館に進んでのちも在三郎と佩川の師弟関係は緊密だった。そして文政八年（一八二四）、江戸へ遊学することになる。

文政八年というのは多久家にとって大きな意味のある年だった。まず九代邑主茂鄰の謹慎が解かれ、次いで十六歳の茂澄が元服を果たした。四歳で家督を継いだが、年少ということで家政も親戚筋の補佐を受け下屋敷に留め置かれていたのが、ようやく名実ともに多久家十代邑主として認められることになった。佩川はこの機を待っていたのかもしれない。八月の末、佩川は邑主茂澄に伴して慶闇寺に詣でて終日を過ごした。西在三郎遊学の命はそこで奉じられ、ただちに書面で在三郎へ伝えられている。

「珮川日記」文政八年八月二十九日

数日のうちに在三郎は多久から出てきた。そして「誰に付いていけばいいのか」を佩川に尋ねている。この一文によって江戸遊学がかねてからの打ち合わせのもと図られていたことがわかる。佩川は即座に岡本元永という名前をあげ、その人物に会う段取りをつけてやる。岡本元永は一時弘道館の教諭にも進んだ本藩の御側役で、佩川とはとても懇意な間柄だった。この前日の夜も佩川と語らっている。面会を済ませた在三郎はすぐに長崎に向かっている。遊学の支度をするためである。数日後、岡本元永に江戸詰日付が命じられた。その日佩川は元永宅を訪れ、江戸赴任に際しては在三郎を随行させることを約している。さらにその足で弘道館教官の井内南涯を訪ね、ここでも在三郎の遊学に関して相談をしている。

つまり、岡本元永には以前から江戸詰の内示が出ていたのである。またとない好機だった。十六年前佩川は邑主茂鄰の伴をするという形で古賀精里の門を叩いた。今多久家の体制は不十分とはいえ、江戸藩邸の目付役が後見人となれば、心配性の佩川も安心して送り出せる。元永への正式な命が下りるのを見計らって、佩川は満を持して茂澄から在三郎への遊学の命を引き出した。

万端滞りなく事が運ぶと、佩川は江戸の古賀侗菴へ書をしたため、月餅を付けて送っている。長崎で在三郎に買い求めさせたものだろう。どこまでも用意周到な佩川だった。さらには佐賀を発った元永一行を境原まで追いかけ、中原の駅で元永に餞別ばかりか書画数幅を贈る念の入れようだった。

孤軍奮闘、なんとしてでもひとりの若者を江戸で学ばせる必要が佩川にはあった。経歴と人脈、それは片田舎で学んでいては決して掴めないものであることを、佩川自身が一番承知していた。

三年が過ぎた秋の終わり、佩川は独り椋ノ瀬橋に立って在三郎の帰りを待っていた。

詩、それは学問の華のようなもので、ただ優秀なだけでは及ばない所にあるものだった。「我邑師儒幾善鳴　教河遺澤自先生」文政元年に東原庠舎で川浪自安の百年忌が行われた時、佩川は「我が邑の師儒が少しばかり詩作に長けているのは　川浪自安先生の訓えから始まる伝統である」という意味の献詩を残している。「善鳴」というのは「善く鳴る」ことで、詩が上手いことを意味している。これが多久の学問の本髄であると佩川は思っていた。その誇りを明日に託する者、西在三郎、鼓岳は善く鳴った。打てば響くその才能の帰りを佩川は待っていた。

西鼓岳は後年鹿島侯に招かれ鹿島藩生を教えることになるが、安政四年（一八五七）、雪の多良岳で遭難して亡くなる。鹿島での授業は草場船山に引き継がれた。

多久家文書
『水江事略』（翻刻文）紹介　7

水江事略巻之四　長信公譜之三

長信公譜三　元亀元年庚午九月ヨリ　天正元年丙子十月ニ至ル

九月隆信公我公ノ御勲功ヲ賞セラレ多久ノ庄ヲ加封セラル是當家多久ヲ領セラル、ノ初ナリ隆公我公ニ告テ曰ク抑多久城ハ西方ノ樞要ナリ御邊能是ヲ守リ油断有ヘカラス有馬平戸後藤松浦等ノ者ハ國中ノ豪傑ニシテ專武威ヲ振フノ輩ナリ萬一モ武備怠ル事有ハ其虚ニ乗シ敵立所ニ起ラン能々御用心有ヘシトナリ我公仰迄モ候ハスト御答ニテ夫ヨリ梶峯ノ城御修理アリ且又群臣ノ居宅ヲ城下ニ構ヘラル同月十五日公士卒五百餘人ヲ率ヒテ城ニ入御移徒ノ儀式ヲ調ラル龍造寺下総守信種御後見人トシテ是ニ従ハル先達テ屋敷ヲ城下ノ西ノ原ニ構ユ（**子孫今ニ是ニ傳フ**）其日公ニ従テ入城スル所ノ士七十五人

龍造寺石見守　石井大隅守　村山常陸介　西岡丹後入道　鷲崎縫殿助　蒲原相模守　土肥相左衛門尉　福地蔵人　江副備中守　南里隼人助　吉岡玄蕃允　石井伊賀守　石井勘解由助　木下刑部丞　堤兵部丞　河崎増怒入道　松尾九郎右衛門尉　横尾杢允　副嶋佐渡守　鶴田暁卜齋　前田上野介　中嶋右衛門兵衛　藤崎市左衛門尉　北村掃部助　米原主馬允　徳久土佐守　安住對馬守　下村弥右衛門尉　成富七郎兵衛尉　石田軍兵衛尉　大塚佐渡守　南里市佐　津山九郎右衛門尉　福地新右衛門尉　御厨四郎兵衛尉　弥富主馬允　鶴田善左衛門尉　田中右京亮　村岡又左衛門尉　枝吉藤右衛門尉　萩原彦左衛門尉　江副左馬允　飯盛修理亮　高津藤次兵衛尉　横尾隠岐守　横尾九郎兵衛尉　石丸九郎右衛門尉　櫛山主水佑　水町相右衛門尉　副嶋左近允　板屋左京亮　中野源左衛門尉　西久保藤次左衛門尉　宮崎刑部左衛門尉　筒井相左衛門尉　侘間信濃守服部佐渡守　副嶋五郎左衛門尉　山田主水佑　吉嶋孫兵衛尉　馬郡杢左衛門尉　西山四郎左衛門尉　下村新兵衛尉　袋二郎左衛門尉　今泉二郎右衛門尉　三ヶ嶋平次兵衛尉　菖蒲勝右衛門尉　案弥七兵衛尉　森二郎左衛門尉　同三五左衛門尉　今泉四郎兵衛尉　坪上源五左衛門尉　藤山三郎五郎　江副三郎右衛門尉　副嶋主税助

古老傳ニ云往昔龍家ノ元祖當國下向ノ時附従者七十五士公先例ヲ追テ譜代新参ヲ分タス七十五士ヲ率ユ其餘ノ輩ハ水江ニ留置レ月ヲ隔テス御呼寄セナリ後日参候シテ多久ニ居住スル輩ニハ

犬塚九郎二郎（**犬塚彈正忠鎮家ノ次男芳岩夫人ノ甥ナリ**）野田安藝守　木下進士允　久松源太左衛門尉　原右衛門允　河原左馬允　金持舎人助　諸田賢順齋　小方新左衛門尉　山口兵部丞　山口備後守　豊将鑑　高津内蔵助　西四郎左衛門尉　徳久四郎左衛門尉　飯盛隼人助　本田右京亮　吉田兼清齋　吉田右衛門允　中河内壹岐守　中路久左衛門尉　津留弥左衛門尉　内田新兵衛尉　寺町越後守　牟田弥平左衛門尉　副嶋善兵衛尉　新郷神兵衛尉　橋本左衛門佐　橋本太郎兵衛尉　久松源五左衛門尉　伊勢與三右衛門尉　千布眼助　荒嶋主水允　諸岡弥七左衛門尉　山田長右衛門尉　荒嶋彦兵衛尉　田中與三左衛門尉　早田杢左衛門尉　古賀彦十郎　副野兵部左衛門尉　岩松孫左衛門尉　南里惣左衛門尉　西岡因幡守　佐伯佐渡守　成富與六左衛門尉　古賀對馬守　新郷對馬守　中西治部左衛門尉　勧修寺忠兵衛尉　巨勢周防守　早田清右衛門尉　西岡神左衛門尉　中薗千左衛門尉　松原次郎左衛門尉　深町九郎左衛門尉　渡邊七郎兵衛尉　武岡刑部左衛門尉　吉井三郎兵衛尉（**小田増光ノ子芳岩夫人ノ甥ナリ**）

我公梶峰在城ノ時ヨリ當家ニ属スル輩ニハ

相神浦右衛門允　土橋式部少輔　田代次郎左衛門尉　中嶋右衛門允　庭木右近允　瀬戸口十郎兵衛尉　山下軍助　田中次郎兵衛尉　森右衛門　北河周防守　多々良七郎兵衛尉　大薗主税助　野北源左衛尉　栗副甚左衛門尉　庭木用右衛門尉　栗林孫左衛門尉　石武清兵衛尉　梶原與助　峰權左衛門尉　峰十郎兵衛尉　小野佐左衛門尉　岩永八郎左衛門尉　今村藤右衛門尉　山田長清　平原内蔵助　光武源兵衛尉　古賀長左衛門尉　田中忠右衛門尉　篠原忠尊　岩永久菴　篠河伊賀守　平山新左衛門尉　中嶋忠左衛門尉片桐内蔵助　杠越後守

小城郡西郷ノ住人空閑小五郎桃崎左京我公多久御討入ノ時先鋒ニ加ハリ度々戦功アリ此度御入城ニ付御城中兵糧ノ御足シニモ成下サレカシト八木百七十俵ヲ献ス（**百俵空閑七十俵桃崎**）公其深切ヲ御感賞有テ懇ニ御禮アリ

十二月我公近習ノ士少々召連ラレ水江ニ御越ノ末夫人若君召具セラレ多久ニ御歸リノ御途中萩野（**公ノ領分ナリ**）ノ村長前山美濃守カ宅ニ宿セラル爰ニ小柳弥藤左衛門稲崎主水ト云者アリ櫻町ニ住シテ威勢アル者共ナリ何レモ人數ヲ驅催シ夜分長信公ノ御旅舘ヲ襲ハントス是ハ我公ニ對シ怨ミアルカ故ナリ是ヲ見テ前山ヲ始メ田中高取野田百武河副古賀池田等ノ里人トモ公ノ御旅舘ニ馳參シ得物々々ヲ振テ防キ戦フ敵打負テ敗走ス翌日未明ニ我公萩野ヲ御立有テ森河ヲ渡ラル時ニ小柳稲崎カ伏勢起テ道ヲ遮ル公森ノ八幡霊徳寺ニ陣セラル従兵必死ト成テ烈敷戦ヒ終ニ小柳稲崎ヲ討取萩野ノ郷士尤戦功アリ此時西郷ノ住人空閑某小柳カ悪謀ヲ聞公ヲ救ハント郷士ヲ驅催シ森河ニ馳付見レハ悪黨等既ニ討果サレシ跡ナリシカハ期ニ後レ間ニ合ハサル事ヲ大ニ悔ヒ其侭公ノ御先拂シテ途中警衛ス萩野ノ一揆八十四人前山長門同美濃ヲ頭トシテ御跡ニ附從フ公ハ難ナク御妻子ヲ召具セラレ梶峯城ニ入セラル（**萩野ノ一揆今度ノ功ニ依テ安順公ノ時ニ至リ前山ヲ以村司トセラレ其他功アル者ノ子孫二十一人ヲ以テ嗜ト定メラル**）

小柳稲崎公ヲ怨ミシ起リイカントナレハ初新庄ノ住人ニ伊東四郎兵衛ト云モノアリ八戸神代ニ味方シテ龍家ニ背ク両公御相談ニテ一族伊東兵部ヲ語ラヒ四郎兵衛ヲ討タシム兵部四郎兵衛以下一族二十餘人ヲ討テ首ヲ献ス小柳ハ四郎兵衛カ婿稲崎ハ又小柳カ親類成ニ依テ憤ヲ含ム事久シ此以前弥藤左衛門カ父ノ弥藤次モ此怨ヲ以偽テ公ニ奉公ヲ求メ山口備後守**（長信公ノ家臣）**ト一所ニ在テ公ニ近寄ントザマ〳〵御氣ニ叶フ様ニモテナセシ或夜甲冑ニ身ヲ固メ公ノ寝所ヲ伺フ山口ハ物具ノ音ヲ聞付不審ニ思ヒ礑ト小柳ニ行逢何事ト問フ小柳陳スルニ詞ナク有ノ侭ヲ告山口欺テ曰我御邊トハ無二ノ親友ナリカヽル企ヲ我ニ告サルハ隔テ玉フカ何ヲ隠サン吾又長信ニ恨ミアリイザ共々今宵ノ内ニ本望ヲ達センハイカニト欺キケレハ小柳ハ誅トモシラス甚悦フ山口先舘ニ入リ片蔭ニ隠レ□ヒ小柳カ来ルヲ待受不意ニ討テ是ヲ殺シ首ヲ公ニ献ス公大ニ其功ヲ賞セラレ笹原村三十五石ヲ山口ニ下サル是ニ依テ弥藤左衛門公ヲ父舅ノ仇ナリト稲崎ヲカタラヒ此企ニ及フト云々

同二年辛未　　長信公御年三十四

十一月二十四日後藤貴明ノ兵多久ニ寄来ルノ聞ヘアリ城下ノ諸士各物具シテ西ノ口別府殿田ニ出張ス志久村ノ住人岩永嚴四郎**（後ニ徳永八郎左衛門ト改ム）**後藤勢ノ案内者トシテ高尾カ平ニ登リ多久勢ノ出ルヲ見テ間道ヨリ岡川ニ下リ林ノ蔭ヨリ鳥銃ヲ発シ西岡神左衛門**（丹後入カ弟）**ヲ打ツ多久ノ勇士北村掃部大弓ヲ以テ岩永ヲ躱フ岩永終ニ西岡カ首ヲ捕ル事ヲ得スシテ河ヲ渡リ高尾カ平ヲ越テ志久ニ歸ル其比北村ハ岩永ヲ伐ント志シ岩永又北村ヲ心懸不敵ノ両士互ニ白眼合フテ居ケルカ或時両人志久峠ニテ出合互ニ其武邊ヲ称美シ具足ヲ脱テ取替ハシ是ヲ着シ透間アレハ討取ント志シケレ共互ニ手ヲ出スヘキ詮ナク高笑ヒシテ別レシトナリ其具足今猶家ニ傳フト云

天正元年癸酉　　長信公御年三十六

正月元日後藤カ兵志久村ニ来ル多久勢伍ヲ列ネ岡ノ原ニ屯ス公ノ臣野田與七郎物見トシテ志久峠ニ到リハシタナク岩永ニ行逢接戦ス野田ハ未若兵ナリ敵ハ聞ユル武功者終ニ是カ為ニ討タル岩永其首ヲ捕テ高尾カ平ニ来リ多久勢ニ向テ我今一ツノ首ヲ得タリ我ニ在テ用ナシ返シ進スト喚ハツテ山上ヨリ是ヲ投下タス味方ノ先勢大ニ怒テ是ヲ追フ岩永足早ニ志久ニ退ク其後両軍相持シ戰ハスシテ歸ル

爰ニ鶴崎源太左衛門尉正明ト云者アリ後藤貴明ノ一属ナリ有馬ノ味方トシテ山下ノ墨ヲ守ル一旦ハ公ニ従ヒシカ共事ニ因テ叛心ヲ起シ貴明ニ内通ス女山ノ名頭ト称スル者七十五人及ヒ多久長尾尾岸川ノ地下人大半鶴崎ニ一味ス只下鶴ノ長五人**（林口孫左衛門下津留四郎左衛門毛貫新兵衛築地三郎左衛門西岡對馬）**能村中ヲ申諭シ始終異心ナク兵糧ヲ城中ニ送ル此時分城中微勢ニシテ爰彼所ニ野心ノ者アリト聞ユ是ヲ征伐セラレンニモ武備不如意ニシテ空敷日ヲ送ル九日公近從ノ臣藤崎市左衛門尉ヲ御使トシテ鶴崎カ謀叛ノ由ヲ佐嘉ニ告ラル長尾ノ一揆共是ヲ聞付早速鶴崎ニ知ラセケレハ鶴崎嫡子新六ヲ八ツ溝ニ遣ハシ兵ヲ伏セテ待受シム藤崎ハ御使ヲ勤メ佐賀ヨリ歸リ二瀬川ニテ鶴崎カ兵ヲ伏セテ待懸ル由ヲ聞從者ニ向テ云我武運ノ□歟此度弓矢ヲ携ヘス例ノ弓矢ヲ携ヘナハ敵大勢ナリ□モ恐ル、ニ足ラサルモノヲ残念ノ次第ナリ從者云下津留通ニテ御歸アラハ此敵ニ逢ス藤崎カ云敵ヲ見テ道ヲ避ルハ勇士ノ本意ニ非ス我死ヲ決シテ本道ニ向ハント直ニ矢立ヲ取出シ隆公ノ御返事ヲ書認メ從者松下半助ニ與ヘ城中ニ送ラシム半助カ云我主人ノ御先途ヲ見スシテイカデ此場ヲ立去ン藤崎叱テ云是私ノ事ニ非ス□若我申付ヲ背カハ二世迄ノ勘當成ソト主從暫シ争ヒシカ半助止事ヲ得ス暇乞シテ下津留ヲ通リ難ナク城中ニ入ル藤崎今ハ心易シト主從七人八ツ溝ニ懸リ鶴崎カ兵ト出合力ヲ尽シテ戰ヒシカ敵ヲ討取數多ナリ然レトモ多勢ニ無勢終ニ新六カ為ニ討タル城中ニ此事聞ヘ諸士我先ニト打出這川ノ邊ニ集ル就中野田安藝北村掃部一番ニ進テ川ヲ渡ル鶴崎ハ城兵ノ出ルヲ見テ西山ヲ越テ逃去ル城兵逃サシト追懸シカトモ日既ニ暮ケレハ詮方ナク牙ヲ噛ミソ歸リケル

十月初メ公西山ノ長谷口進士兵衛**（鶴崎新六カ養父新六此比不和ニシテ居ラス）**ヲ召テ曰汝鶴崎新六ヲ討テ首ヲ我ニ見スベシ否ト云ハヽ汝モ又同類タラン谷口兼テ家ニ歸ル親族等ト示シ合セ新六ヲ招ク親六謀トハ梦ニモ知ラス西山ニ来ル谷口栗林等ト謀テ上ミ都土ニ待受是ヲ討取首ヲ公ニ献ス新六カ實父源太左衛門大ニ怒テ女山ノ一揆數百人ヲ驅催シ弟清右衛門ヲ代将トシテ谷口カ家ヲ夜討シ是ヲ殺ス進士兵衛ニ幼児アリ其母是ヲ抱テ沙原ノ祖父ノ家ニ隠ル公甚是ヲ憐ミ玉ヒ城内ニ召サレテ養育セラル芳岩夫人殊ニ懇情ヲ加ヘラル生長シテ谷口弥左衛門ト云後夫人ニ殉死ス**（谷口カ屋鋪ヲ免地ニシテ弥左衛門ニ賜フ子孫代々是ニ居住ス）**既ニシテ鶴崎女山ノ一揆及近郷ノ悪黨数百人ヲ驅催シ多久ニ寄来ル後藤兵ヲ出シテ加勢ス公武備ヲ全フシテ是ヲ防ク一揆敗レ走ル逃ルヲ追テ數人ヲ討取野田安藝鶴崎清右エ門ニ渡リ合突伏セテ首ヲ取ル其餘三ヶ嶋平次兵衛峰十郎兵衛吉嶋軍左衛門力戰シテ各數級ヲ得タリ北村掃部ハ源太左衛門ト西ノ原ニテ鎗ヲ合セ烈敷戰ヒシカ共勝負決セス其他敵数人ヲ討取鶴崎散々ニ討負山下ニ退ク今ノ六地蔵ヲ立シ處其戦場ト云其後女山ノ村長舩山主税志ヲ公ニ通シ或日鶴崎ニ語テ云吾此頃猪ノウヂヲ得タリ射斃シテ饗應セン鶴崎大ニ悦フ夫ヨリ舩山鶴崎カ一族七人ヲ誘ヒ松原山ニ登リ主税父子主從相謀テ七人ヲ討取首ヲ龍造寺信種ニ送ル鶴崎是ヲ聞テ大ニ怒リ舩山カ人質ノ娘ヲ殺スト云々

（以下　次号に続く）

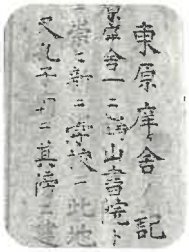
ふるさとの石碑　1　東原庠舎之舊跡

東原庠舎ノ記

東原庠舎　一ニ鶴山書院ト名ツク
元禄十二季　多久邑主贈正五位多久茂文公ノ創建スル所ナリ
公　儒學ヲ崇ヒ新ニ學校ヲ此地ニ設ケ
儒臣　川浪自安　鶴田省庵ヲ教授ニ任シ　闔邑ノ子弟ヲシテ
入テ學ハシメ　又　孔子廟ヲ其傍ニ建テ　自ラ釋菜ノ禮ヲ行ヒタリ
爾來　春秋百七十季　廢藩ニ至ル迄　歴代ノ邑主
其意ヲ継キ　益文学ヲ盛ニシ
其間　石井鶴山　石丸龜峰　草場佩川　等ノ碩儒輩出シ
實ニ肥前文學ノ淵源タリ
明治二季多久郷學校ト改稱シ　幾モナク廢セラル
後世其遺跡ノ湮滅ヲ　恐レ　碑ヲ建テ之ヲ表ス
大正十一季四月十一日孔子二千四百季祭日

高取伊好　題字　幷　助資

建設委員　福地　省三
同　西　英太郎
同　米原　耕蔵
同　大塚　巳一



《メモ　建設委員略歴など》

【高取伊好】

嘉永三年（１８５０）十一月十二日～昭和二年（１９２７）一月七日。佐賀藩多久領の武士鶴田十兵衛斌の三男。號は西溪。九歳の時に長姉ケイの嫁ぎ先である高取家の養子となりその家督を継ぐ。郷校東原庠舎、藩校弘道館で漢学、国学を学び、明治三年（１８７０）上京し箕作奎吾の英学塾三叉塾に入り、翌年慶應義塾へ転学。卒後、明治五年（１８７２）工部省所管鉱学寮へ入学し鉱山学を修める。明治七年（１８７４）鉱学寮を卒後、高島炭鉱の技手として赴任。明治十五年（１８８２）高島炭鉱を辞し、香焼、中の島、柚の木原、芳の谷、端島、坂口、相知炭鉱を手がけ、明治四十二年（１９０９）杵島炭鉱のすべてを買収し、肥前の炭鉱王の異名で呼ばれる。大正八年（１９１９）事業を娘婿盛、長男九郎へ譲り、引退する。

【福地省三】

安政二年五月四日（１８５５）～昭和九年（１９３４）三月二十三日。多久村桐岡の岡村家の三男として生まれ、福地頼久の養子となり福地家を継ぐ。郷校東原庠舎で学び船山塾に入る。塩田小学校伝習所を卒業。教職を経て、明治十四年小城郡書記、同十八年佐賀県勧業諮問委員。同二十二年から三十年まで多久村会議員。同三十二年小城郡特選参事会員を務め、同四十二年から昭和四年まで二十年にわたり多久村長として尽力する。

【西英太郎】

元治元年（１８６４）九月三日～昭和五年（１９３０）八月五日。佐賀藩多久領の武士西雅広の長男、號は西里。高取伊好の従甥。郷校東原庠舎に学び、儒学者岡松甕谷に漢学を学んだ後上京し、中村正直の同人社で英学を学んだ。小城郡会議員、佐賀県議会議員を経て、大正三年（１９１４）の衆議院補欠選挙に当選し、以後、当選回数は六回を数え、民政党総裁、相談役として中央政界で活躍した。さらに、唐津鉄道株式会社取締役、佐賀県農工銀行頭取、高取鉱業株式会社取締役、肥前電気鉄道株式会社取締役、唐津製鉄所監査役を務め、西肥日報社長、佐賀毎日新聞社長となり新聞事業にも尽力した。

【米原耕蔵】

生没年不明。號は義外。詳細については不明であるが、『西溪遺稿』の例言に「米原義外翁亦多久人也、晩年卜居於佐賀」とあり、また、『高取伊好翁伝（稿本）』によると大正十年五月九日から二十四日まで、高取伊好の九州巡歴に同行。昭和二年に『西溪遺稿』『仙山唱和集』の編纂、昭和十二年『金臺遺稿』（草場謹三郎著）の編纂を行っている。なお、明治二十四年八月三十一日付けの「大分県知事岩崎小二郎宛　大分県属　米原耕蔵㊞　内務大臣秘書官巡回復命書」が存し、明治二十四年には大分県の職員をしていたと思われる。大分県別府市野口病院野口雄三郎博士の「お国自慢故郷を語る」という紙名不明の新聞切り抜き、昭和七年八月十五日付のコラムに「最近まで日田にゐた尾形善忠氏、懸の初代土木課長をしてゐた米原耕藏氏、中津に居た福地隆春氏も多久の人、何れも文をよくし詩もよくし書をよくした人々。米原氏は權威ある漢學者であった。」とある。

【大塚巳二】

明治二年（１８６９）十一月十八日～昭和二十五年（１９５０）三月二十一日。多久家家臣大塚良一郎の長男として多久村東の原に生まれる。號は廟山。多久小学校、丹邱義学で学び、儒学者鳥越剛撲に漢学を学ぶ。さらに、東京学館、専修学校、東京法律学校、東京哲学館、和仏法律学校などの校外生として英語、哲学、法律を学ぶ。小城郡郡会議員を十五年五ヶ月、多久村会議員を三期、大正二年には佐賀県議会議員に当選。孔子研究や儒学の普及に生涯を捧げ、多久聖廟の国宝、史蹟指定に尽力した。研究の為に蒐集した漢籍本や聖廟関係の書籍「廟山文庫」は多久市先覚者資料室に寄贈され保管され、槙垣に囲まれた聖堂小路の旧宅は煉瓦造りの書庫とともに昔の姿をとどめている。

【建設費用】

『高取伊好翁伝（稿本）』には、「大正十一年（１９２２）四月、多久村旧東原庠舎址に記念碑及び草場佩川先生宅前に記念碑建設費金壱千参百拾五円四十五銭ヲ寄付ス。」と書き記されている。

《儒林》

西鼓岳（享和三年（一八〇三）～安政四年（一八五七））

西鼓岳小伝について

明治十六年（一八八三）、文部省は全国各府県及び旧藩主家に旧藩時代の教育資料の提出を命じ、明治二十三年（一八九〇）から二十五年（一八九二）にかけて「日本教育史資料」（全二十五巻九冊）が刊行された。

その時多久から提出されたのが、「旧佐賀藩　多久邑學制沿革并學校取調書外ニ圖面六葉副」の調書である。その中に「西鼓岳小伝」という一文が記載されている。「日本教育史資料」における旧藩校の教授および助教の経歴は「学士小伝」としてほとんどが墓碑銘の掲載という形式になっているが、西鼓岳に関しては「鶴田皓玄縞謹撰」とあるだけで、墓碑銘には言及されていない。

多久町専称寺にある西鼓岳の墓碑を確認しにいくと、やはり「西鼓岳小伝」は墓碑銘である。ただこの墓は大正十一年に高取伊好によって再建されたもので、平田秀生・号は呼鵞の書となっている。鶴田斗南の撰文に「姪」と刻まれているのは「甥にあたる者」という続柄である。再建ということは少なくとも墓は建てられていたが、明治十六年の頃にはなかったということになる。そこで、鶴田斗南の撰文としてのみ銘文が教育資料に残されたわけである。

この碑文はその後、昭和六年に発行された「舊多久邑人物小志」に読み下し文となって引用されているが、文語体で難解な嫌いも否めないことから、現代語に直してみた。高取伊好による再建を経た西鼓岳の墓、その墓碑を尋ねて先人が語り継いできたことを、伝えていければと思う。

《墓碑銘》

西賛字叔襄號鼓岳又号芳隣舍父曰忠能居西肥多久邑鼓岳其第四子幼而頴
敏有氣慨ア邑人無子者多愛其才欲養而為嗣皆賀肯曰丈夫宜自立安依人熱
入邑庠受業草場佩川略通経史遂入藩學々復大進文政乙酉邑主命游學東武
時年二十三入侗菴古賀博士門居三載而歸職干邑學邑主給世禄若干使別與
一家成其志後以邑學助教兼監察後進之士頼以就材者多矣鼓岳工詩其在江
都同窓諸子月次限韻課題鼓岳毎被衾而臥迨起而下筆意思雋逸構造奇巧莫
不出意表諸子相謂曰鼓岳衾中吟動輙驚人侗菴有詩曰佩川別後得西生誰敵
丹丘多善鳴欲識二人優與劣春蘭秋菊各才情所著芳隣舍詩鈔三巻頼山陽亀
井昭陽廣瀬淡窓其他當時碩儒多所評騰淡翁曽曰嗣鎮西詩家三傑之後者得
西鼓岳其一人而未得其二人蓋当時詞人推佩川淡窓及吉田平陽為鎮西三傑
云鼓岳酬詩深謝其不当晩年坐事屏居嶺南無幾得宥怒適有鹿島侯之嘱教授
鹿藩生徒麗豪好奇之癖尤而不減安政丁巳春游諫早将帰偶大雪四山戴白數
尺曰奇勝可討也衆留之不可乃獨行抵多羅絶巓遂傷干苦寒途而卒時人惜之

姪　鶴田皓玄縞謹撰
呼鵞　平田秀生愼書

《語句》

熱　異体字「執」の下に「火」が使われている
二十三時　文政乙酉（きのととり）文政八年（一八二四）

迨　タイ　およぶ
雋　シュン　セン　すぐれる
吉田平陽　筑前秋月藩士　寛政二年（一七九〇）～文久三年（一八六三）　藩校稽古館教授を経て御用役となる
嶺南　北方町
屏居　ヘイキョ　世間から隠退して家に閉じこもる
麤豪　ソゴウ　豪放的意志
安政丁巳（ひのとみ）　安政四年　一八五七
巔　テン　頂き
玄縞　鶴田皓の字

西賛　字は叔襄、号は鼓岳又は芳隣舎という。父は忠能といい、西肥の多久の住である。鼓岳はその第四子、幼い頃から鋭敏で大いなる気概を持っていた。多くの子の無い者たちが、才気溢れる鼓岳を養子にして跡を継がせたいと望んだが、鼓岳には、丈夫というのは安易に人に頼ることなく自立するものであるという信念があった。

邑庠（東原庠舎）に入り草場佩川からおおよその経書と史書（略経史）を学び、次いで藩校に入り学は大いに進んだ。文政八年（一八二四）、二十三歳の時に邑主（十代茂澄）の命で江戸に遊学することになり、古賀侗菴博士の門に入る。三年の後邑へ帰り、邑学の職に就く。邑主はわずかではあるが俸禄を与え別に一家を興させた。幼い頃からの鼓岳の志は遂げられ、その後は邑学の助教兼監察として、有能な人材となる後進の士たちを多く育てた。

鼓岳は詩に巧みだった。江戸にいる頃は、毎月同窓の諸子と共に課題となる韻を決めて詩を競っていたのだが、その都度布団を被って横になったまま詩作を練り、そしてひとたび起き上がると一気に筆を走らせた。その詩の秀逸さと巧みさは常に仲間たちの意表をつくものだった。いわゆる「鼓岳の衾中吟（きんちゅうぎん）」といわれるもので、それは人を驚かしてやまなかった。侗菴は詩に残している。

「佩川別後得西生　誰敵丹丘多善鳴　欲識二人優與劣　春蘭秋菊各才情」

佩川と別れてのちに西鼓岳を得た。多久には詩を善くする者が多いというが、誰も敵いはするまい。どちらがすぐれているか、春蘭と秋菊の各々の才情に優劣はつけがたい。

鼓岳は芳隣舎詩鈔三巻を著わした。それは頼山陽・亀井昭陽・廣瀬淡窓など当時の名高い儒学者たちから高い評価を得ることになる。かつて淡窓翁は、鎮西詩家三傑の後を継ぐ者として、一人西鼓岳を得たが、あとの二人はまだ見当たらないと言った。当時は佩川・淡窓そして吉田平陽を鎮西三傑といっていたようである。鼓岳は淡窓の言葉に対して、深く謝しながらもそれには当たらないことを詩に為して、これに報いている。

晩年、事に座し山の南方にあたる北方に蟄居することになるが、いくばくもなく許され、鹿島侯に招かれて、鹿島藩校の生徒を教えることになる。

しかし、生来の豪放さと好奇心の強さはやむことはなかった。安政四年（一八五七）、諫早へ遊びに行った帰りに大雪に遭遇する。数尺の雪に覆われた四方の山々、この絶景を征服してやるという鼓岳を、周囲は止めたが、独り多良山中に分け入った。寒さに苦しみ傷み、遂に雪の絶勝のなかに亡くなる。人々はこれを深く惜しんだ。

姪　鶴田皓玄縞謹撰
呼鵞　平田秀生愼書

（草場佩川の会　副会長　尾形恵子）

第二十三回 全国ふるさと漢詩コンテスト

令和二年十一月二十九日(日)

公開講座　演題

「論語あれこれ～論語を面白く読む方法」

講師　宇野　茂彦 先生

（公益財団法人斯文会理事長）

令和二年十一月二十九日（日）、「第二十三回全国ふるさと漢詩コンテスト」の表彰式が行われました。

江戸時代の郷校東原庠舎で学ばれていた国学や漢学に親しんでいただこうと始まったコンテストも二十三回を迎え、国内の漢詩大会の中でも指折りのコンテストになってきました。

今回は「音」「声」をテーマに公募し、全国から二百八十八点の作品が集まりました。石川忠久先生（学校法人　二松学舎顧問・公益財団法人名誉会長）、佐藤保先生（お茶の水女子大学名誉教授）、鷺野正明先生（国士舘大学文学部教授）に審査をいただき、最優秀賞に山梨県都留市の髙山一雄さんの『新春有感』が選ばれました。

髙山さんの作品は、多久聖廟展示館敷地内に詩文を陶板に刻んだ石碑が建立され除幕式が行われました。

最優秀賞

新春感有り

遊歩御園佳氣新
好文木上好音頻
清香馥郁滿天地
迎得令和庚子春

山梨県都留市　髙山　一雄

御園を遊歩すれば　佳気新たなり
好文木上　好音頻りなり
清香馥郁　天地に満つ
迎え得たり　令和庚子の春

優秀賞

梅花に懐う

君逝三年又遇春
梅花開處奈無人
庭前風冷孤魂斷
空聽鶯聲追憶新

佐賀県佐賀市　副島　陽子

君逝き三年　又春に遇う
梅花開く処　人無きを奈せん
庭前　風冷やかに　孤魂断ず
空しく聽く鶯声　追憶新なり

優秀賞

夏日江畔

江邊雨過午風輕
葭葦萋萋浥露清
橋上停筇香氣裏
鐘聲時和晚蛙聲

東京都杉並区　高橋　純子

江辺　雨過ぎ　午風軽し
葭葦　萋々　露に浥ひて清たり
橋上　筇を停む　香気の裏
鐘声　時に和す　晩蛙の声

入選

旅夜　絡緯を聞く

促織聲寒菊枕邊
起溫殘酒獨凄然
杯中想見孤燈下
纖手補衣猶未眠

千葉県松戸市　田沼　裕樹

促織の声は寒し　菊枕の辺
起って残酒を温めて　独り凄然
杯中　想見す　孤灯の下
纖手　衣を補って　猶お未だ眠らざるを

入選

農事偶成

軽風習習一村春
蝶舞燕来鶯語新
収穫多忙農事急
夕陽田野荷鋤人

大分県大分市　菅　勲

軽風習習　一村の春
蝶は舞い　燕来り　鶯語新たなり
収穫多忙　農事を急ぐ
夕陽の田野　鋤を荷う人

入選

秋晩　詩を賦す

獨坐繙書對短檠
月輪斜照露華清
苦吟雙淚有誰伴
徹夜階前蟋蟀聲

神奈川県藤沢市　小嶋明紀子

獨坐　書を繙きて　短檠に對す
月輪　斜めに照らして　露華　清し
苦吟　雙涙　誰有りてか伴ふ
徹夜　階前　蟋蟀の聲

奨励賞

令和庚子豪雨

黒雲重疊絶天光
猛雨襲村水勢強
閑靜小川成瀑布
激流音響破堤塘

佐賀県多久市　武田　耕一

黒雲重疊　天光を絶ち
猛雨村を襲い　水勢強し
閑静なる小川　瀑布と成り
激流音響　堤塘を破る

公開講座（宇野茂彦先生）

石碑披露（宇野先生と髙山一雄氏）

来訪・来信・雑録

10月3日　鶴山塾「中国古典の扉⑤」（孔子の里理事　武田耕一）
10月10日　鶴山塾「はじめて学ぶ古文書⑤」（多久市郷土資料館学芸員　山口佐和子）
10月18日　草場佩川墓地清掃作業
10月20日　令和2年度春季釈菜学校関係者事前練習
10月21日　令和2年度秋季釈菜総練習
10月25日　令和2年度秋季釈菜
10月28日　多久市立東原庠舎中央校3年生。多久聖廟についての勉強会
11月7日　鶴山塾「中国古典の扉⑥」（孔子の里理事　武田耕一）
11月14日　鶴山塾「はじめて学ぶ古文書⑥」（多久古文書の村村民　舌間輝吉）
11月24日　草場船山書・石碑調査（伊万里市大川小学校、伊万里小学校）
11月29日　第23回全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式・石碑除幕式
公開講座「論語あれこれ～論語を面白く読む方法」（公益財団法人斯文会理事長　宇野茂彦）
12月5日　鶴山塾「中国古典の扉⑦」（孔子の里理事　武田耕一）
12月12日　鶴山塾「はじめて学ぶ古文書⑦」（多久古文書の村村民　舌間輝吉）
12月19日　鶴山塾「水江事略をよむ⑪」（孔子の里常務理事　服部政昭）
1月8日　合格絵馬奉納式（多久市観光協会）
1月21日　多久市財政援助団体監査（多久市監査事務局）
1月23日　鶴山塾「中国古典の扉⑧」（孔子の里理事　武田耕一）
1月24日　杉岳山不動尊大聖寺（北方町）杉板襖絵の調査
2月6日　鶴山塾「中国古典の扉⑨」（孔子の里理事　武田耕一）
2月14日　聖廟の森、雑木伐採
2月18日　東原庠舎防火訓練（多久市消防署・鹿島防災・孔子の里職員）
2月20日　鶴山塾「水江事略をよむ⑫」（孔子の里常務理事　服部政昭）
2月21日　多久儒者尾形一精の墓碑調査（嬉野市塩田町）
2月22日　合格絵馬奉納式（多久市観光協会）
2月27日　鶴山塾「蝦夷地開拓判官・島義勇と鶴田晧」（佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長　古川英文）
2月28日　合格絵馬奉納式（多久市観光協会）
3月3日　令和3年度春季釈菜委員会
3月4日　佐賀県立博物館（佐賀市）桐野山妙覚寺の両界曼荼羅写真撮影
3月6日　鶴山塾「中国古典の扉⑩」（孔子の里理事　武田耕一）
3月13日　鶴山塾「はじめて学ぶ古文書⑧」（多久古文書の村村民　舌間輝吉）
3月18日　公益財団法人孔子の里評議員会
3月24日　久米至聖廟訴訟勉強会、最高裁判決の考え方（安永法律事務所）
3月27日　『鶴山遺稿』出版について会合（佐賀市市民活動プラザ）

公益財団法人
孔子の里
販売物

◇百人一首式
論語カルタ
３，０００円

◇論語
日めくりこよみ
８００円

◇ガイドブック
『多久聖廟を歩く』
５００円

問い合わせ先
公益財団法人 孔子の里　電話 0952-75-5112

当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。
百人一首式論語カルタ　検索

◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。
ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- **会員の種類**
  個人賛助会員　年会費　一口　３，０００円
  法人賛助会員　年会費　一口　１０，０００円
- **入会申込み・お問い合わせ**
  〒846-0031　多久市多久町1843番地３　東原庠舎内
  公益財団法人 孔子の里 事務局
  電話　0952-75-5112　FAX　0952-75-5320
  E-mail　ko-si@po.taku.ne.jp　孔子の里　検索
  詳細は当財団ホームページをご覧下さい。

第５回 多久百景 写真コンテストのご案内

～あなたの写真が多久百景に～

（毎年二十景・５年間で百景を認定します）

テーマ　多久の四季・伝統文化・歴史
応募期間　2021年５月１日～７月31日
応募料　無料
応募条件　多久市内で撮られた写真に限定
グランプリ賞金　10万円

詳しくは当財団HPをご覧いただくか、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

問い合わせ先　公益財団法人 孔子の里
「多久百景 写真コンテスト」係
電話 0952-75-5112

孔子の里　検索

第４回 多久百景写真コンテスト入賞作品

グランプリ作品

「雪降る聖廟」

柳木　繁弘
（佐賀市）

漆黒の闇に朱塗りの恭安殿が浮かび上がるライトアップされた多久聖廟。降る雪にフラッシュを発光させて雪の粒をとらえている。白色のアクセントも、静寂の中に凍とした美しさを引き立てている。聖廟は四季折々の表情を見せてくれるが、新年のこの時期だけの光景を捉えた奥行きのある秀作だ。

準グランプリ作品

「麦わらの夏」

鬼木　敬子
（福岡市）

聖廟に続く参道を無心に駆け出す少女。空を麦わら帽子と両手に持つ昆虫採集の網が夏を象徴している。突然の麦わら帽子の動きに素早く足元が反応し、少女の驚き・好奇心・恥じらいを凝集した目が帽子を追いかけている瞬間をうまく捉えている。撮影者の意図とそれに応える子どもの姿が、見事に結集され、誠に微笑ましい画面に仕上げられている。

●聖廟の森に棲む動物たち●

杜鵑（ホトトギス）

▲杜鵑（ホトトギス）

ホトトギスは巣を作らない。卵は別種のウグイスの巣の中に産み、そのウグイスに育ててもらう。

テッペンカケタカと聞きなせる声で鳴きながら、聖廟周辺を飛び回る。珍しくはないが、その姿をじっくり見るのは難しい。だから、撮影はずいぶん苦労した。

雌雄ほぼ同色だが、なかには赤色型の雌がいる。この写真がそうである。

（日本野鳥の会　福田　司）

古くから和歌や俳句、物語の中にもよく出てくる鳥で、「杜鵑」「時鳥」「不如帰」「子規」などの漢字表記や異名が多くあり、「目には青葉山ほととぎす初鰹」でも知られるように、田植えが始まる頃になると、「テッペンカケタカ（天辺かけたか）」「トッキョキョカキョク（特許許可局）」「ホンゾンカケタカ（本尊かけたか）」などの鳴き声が聖廟の森に響き渡る。

四季それぞれに素晴らしい移ろいを見せる聖廟の森のなかでも、この頃の光景が一番好きだ。（服）

編集後記

今年の冬は、暴風雪による積雪や路面凍結する日が多く高齢の身には厳しい日々でしたが、春の訪れは例年になく早く、聖廟の森には、様々な花が咲き誇り、小鳥たちの囀りが聞こえています。

この季節になると毎年のように「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」の一節が思い出されます。来る年ごと花の姿に変わりはないが、来る年ごとに人の姿は変わっていく。

庠舎が出来て三百三十二年、多くの先賢たちが同じ想いを繰り返してこられたのだろうと思います。

私事ですが、わずか五年間でしたが今期で孔子の里の常務理事を退任する事になりました。在任中は格別のご厚情ご指導を賜り有難うございました。厚く謝意を申し上げます。

「応に憐れむべし半死の白頭翁」（服）